

配偶者からのサポートにみる夫婦の関係とジェンダー差

池田政子*・川浦康至**・伊藤裕子***

*山梨県立女子短期大学、**横浜市立大学、***聖徳大学

Marital relationship and gender difference in spouse support

Masako IKEDA, Yasuyuki KAWAURA, Yuko ITO

Yamanashi Women's Junior College, Yokohama City University, Seitoku University

Summary : The purpose of this research was to examine gender difference in emotional support between spouses. The subjects were 182 couples. By conducting a non-hierarchical cluster analysis on their responses to supportive agents, the couples could be classified into three clusters: (1) the cluster of spouses mutually choosing their partner for support had the most satisfaction in their relationship; (2) the cluster of spouses not choosing their spouse for support had the least satisfaction; (3) the cluster in which husbands choose their wives but not vice versa. In the third cluster, their communication was poor and wives felt much alienation. The husbands, however, felt little alienation. There was a gender gap in how they perceived their relationship.

Key Words : 夫婦関係 (marital relationship)、情緒的サポート (emotional support)、疎外感 (alienation)、ジェンダー差 (gender difference)、クラスター分析 (cluster analysis)

一般に、配偶者のサポートは心理的適応や結婚満足度に影響することが知られている。例えば結婚満足度は、配偶者に与えるサポートおよび配偶者から受け取るサポートの両方から影響を受けている¹⁾。ただし詳細に見ると、サポートの位置付けや影響にはジェンダー差が存在することが示唆されている。多くの研究によれば、サポート源としての配偶者の比重は両性間で異なり、女性に比べ、男性は対人ネットワークのサイズが小さく、妻への依存度も高い。男性は妻および職場の上司との関係が良ければ人間関係についての満足度が高まるが、女性では友人と家族の影響の方が大きい²⁾。また男性の幸福感は、地域社会のサポートよりも妻からのサポートが関連している³⁾。このため、中年期以降、パートナーがいないことは男性の方に大きな影響を与え、抑うつ傾向や孤独感が女性より強くなる^{4) 5)}。

日本の勤め人を対象とした調査でも、男性の生きがいは仕事と並んで妻や結婚生活と深くかかわっているのに対し、女性は夫より友人の比重が高い⁶⁾。高齢者についても同様である。60歳以上の男性のサポート・ネットワークは妻を中心に構成されており、妻から実際の援助が期待できないと孤立感は強まり、妻を亡くすと幸福感は低下する。一方、女性のサポート・ネットワークは子ども中心であるため、夫を亡くしても、子どもがいれば幸福感は変化しない⁷⁾。70歳男女についても、情緒的サポートのネットワークは、男性が妻中心であるのに対し、女性は子ども中心でかつ近隣・友人を選択する人が多く、女性のほうが多様なサポート・ネットワークを持っている⁸⁾。また、介護に関してはこのようなサポート・ネットワークのジェンダー差がさらに拡大し、男性は妻を強く指向しているのに対し、女性は夫の比重がもっと低くなっていた⁸⁾。

筆者らは、末子が3歳から中学生までの子育て終了前の夫婦を対象に、情緒的サポートに関する結婚前・後のサポート源について調査した⁹⁾。その結果、次のようなことが明らかになった。結婚前のサポート源は男女で類似しており、親、友人、恋人などが同じような比重を持っているが、結婚し子を持つこ

とによって、配偶者と子どもの比重が高いサポート・ネットワークに男女とも再構成される。しかし、男性のサポート源は「妻子」に集中し、わずかに同僚・上司が加わるのみであるのに対し、女性では、子どもの比重は男性と同程度であるが、配偶者(夫)の比重は男性より低い。

また女性の場合、結婚後も親・きょうだいとの関係が維持され、さらに子どもを通じてできた友人が加わることにより、多様なサポート源を含むネットワークとなっていた。子育てによって男女間の役割分業が開始されることで、ネットワークが異なってくると考えられる。

では、情緒的サポート源としての配偶者の比重を左右する要因は何だろうか。上の筆者らの結果では、男女とも夫婦の会話時間が長いほど、サポート源としての配偶者の比重が高くなり、女性ではさらに夫の家事分担度が高いほど、サポート源としての比重も高い⁹⁾。一般に、女性は夫と価値観を共有し家事を分担し合うことを「夫婦関係で大切なこと」と考える傾向が強い⁶⁾。そうであれば、家事分担のあり方は、妻の夫への態度や心理的適応に関連するであろう。実際、生活者としての自立度が高い夫の妻ほど、夫婦関係に満足している¹⁰⁾。また、夫の家事サポートが少ないと感じる妻の幸福感は低い¹¹⁾。共働き夫婦の場合、夫の家事分担度が低いと夫に対する妻の満足度も低くなり、同時に仕事の疲労感を強め、心身の不調感をもたらす¹²⁾。逆に、夫の家事サポートがあると、役割間葛藤からくるストレスは緩和される¹³⁾。このように、妻にとって夫の家事分担の高さは実際の負担減少以外の心理的な意味を持ち、そのことがサポート関係に影響をもたらすと考えられる。

会話についてはどうだろうか。女性は夫婦間の双方向の会話を男性以上に望んでおり¹⁴⁾、会話の不足は妻の大きな不満源となっている¹⁵⁾。筆者らは、さきの調査データを用いて、会話時間とサポート源としての配偶者の比重、さらに心理的適応(疎外感を指標とする)を含めた因果関係について分析を行い、両性間の比較をした。その結果、①会話時間が多いことはサポート源としての配偶者の比重を高め、かつ疎外感を低減させる直接的な効果を持つが、その効果はどちらも女性の方が高い、②サポート源としての配偶者の比重から疎外感へのパスは男性にのみ見られ、その効果は会話時間よりも大きかった¹⁶⁾。つまり、男性は情緒的サポート源としての妻の比重が高いことが、疎外感を低減させるのに対し、女性では、むしろ夫との会話時間の多さが疎外感を低める直接的効果を持っている。女性にとっては、会話や家事の分担にみられるような実際的なパートナーシップが、情緒的サポート源としての夫の重要度を高め、また心理的適応に影響する重要な要因であるのに対し、男性の場合、実際的なパートナーシップの質よりも、自分にとって妻がサポート源とみなせるかどうかの方が、心理的適応にとって重要であるようにみえる。

さて、上に述べた研究の多くは、妻群と夫群という群間の比較によっており、夫婦対での分析はきわめて少ない。筆者らのこれまでの分析も同様であった⁹⁾¹⁶⁾。しかし、男女別に個人単位で分析されて得られた知見だけでは、情緒的サポートに関わる夫婦間の相互的な関係性を描出するには不十分であろう。現実の夫婦像を考えると、それぞれの夫婦対を単位として、妻と夫の相互的な関係を軸に分析することは、有効な方法と思われる。

目 的

本研究では、さきの筆者らの調査資料を用いて、夫婦単位での再分析を行う。一組の妻と夫が、互いに相手を情緒的サポート源としてどう位置づけているか、その相互的な関係をベースに分析すると、実際にはどのようなサポート関係を持つ夫婦がみられるだろうか。また、そのサポート関係のあり方は心理的適応にどう関わっているのだろうか。情緒的サポート源を軸に夫婦を類型化し、その特徴を明らかにしてより具体的な夫婦像の把握を試みる。検討されたのは、次の点である。

1. サポート関係からみた夫婦の類型: サポート源として配偶者に依存する程度は男性の方が女性より高いという結果⁹⁾は、すべての夫婦に当てはまるのだろうか。形式的には、①妻・夫ともに配偶者をサポート源として重視する「相互選択」型、②夫は妻を重視しているが、妻はそうではない「夫の一方選択」型、③妻は夫を重視しているが、夫はそうではない「妻の一方選択」型、④妻・夫ともにサポート源として配偶者の比重が小さい「相互拒否」型という4類型が有り得る。実際にはど

の類型が存在するのだろうか。

2. 類型の特徴：抽出された各類型はどのような特徴を持ち、どのような夫婦象を提供するか。また、そこにジェンダー差は認められるだろうか。以下の4点について、類型間の比較が行われた。①デモグラフィック要因、②妻・夫それぞれの配偶者以外のサポート源、③妻・夫の心理的適応との関係、④サポート源としての配偶者選択や心理的適応に関わる要因である会話時間や家事分担度、およびそれについての夫婦の認知ギャップ。

方 法

調査の手続きと回答者

分析対象は、川浦ほか(1996)⁹⁾で用いられたデータから夫婦単位で抽出された。対象者は都内S区に居住する3歳児、小学校3年生、中学校2年生のいずれかの子どもを持つ夫婦各300組、計900組である。S区の全5地区から、それぞれの特徴を反映すると思われる学区に位置する小学校および中学校を、生徒数も考慮して各1校ずつ選定し(小学校5校、中学校5校)、学校を通じて調査票を配布した。3歳児については、S区各保健所(5箇所)に3歳児健康診断に来所した両親に調査票を配布し協力を求めた。いずれも郵送により回収された(1992年9～10月)。回収数は女性259票(回収率28.8%)、男性185票(同20.6%)であり、そのうち妻、夫の双方から回答が得られている182組を分析対象とした*。回答者の属性を見ると、妻の生年は1950年以前22.5%、1951～55年36.7%、1956年以降38.3%、夫の生年はそれぞれ48.4%、27.5%、24.2%である。夫婦の子ども数の平均は2.1人、末子の年齢は就学前が41.7%、小学生37.8%、中学生20.6%となっている。妻の58.8%は専業主婦であり、パートタイマー・自営業従事が30.2%、常勤者は11.0%である。夫は77.5%が常勤者、19.8%が自営業・自由業などである。

今回の分析に用いられた調査項目と分析方法の詳細については、以下、結果の部分で逐次述べることにする。

結 果

1. サポート源からみた夫婦の類型

情緒的サポートの状況として典型的な7場面(大日向, 1988)¹⁷⁾のそれぞれについて、サポート源を配偶者、子ども、親・きょうだい、友人、職場の上司・同僚など14種類の中から2つまで選択してもらった⁹⁾。なお14種類の中には、サポート源が「ない」、「必要ない」という選択肢も含めた。7つのサポート場面は、「つらい時や困ったとき相談する」「自分の考えや意見を率直に交し合える」「あなた自身のことをかってくれたり、高く評価してくれる」「いっしょに行動して楽しい」「安心していっしょにすることができる」「自分のことを必要としている」「その人のためならできるだけのことをしてあげたいと思う」である。この回答のうち、配偶者の選択に注目して次のように分析を行った。

7つの場面におけるサポート源を、まず「配偶者」と「配偶者以外」とに二分し、そのうえで、夫婦の回答状況を4つの指標に構成した。つまり、互いに配偶者をサポート源として選んでいる場面(相互選択)の数、夫は妻をサポート源として選んでいるが、妻の方は夫を選んでいる場面(夫の一方選択)の数、反対に妻は夫をサポート源として選んでいるが、夫の方は妻を選んでいる場面(妻の一方選択)の数、サポート源として互いに配偶者以外を選んでいる場面(相互非選択)の数を、夫婦ごとに求めた(4指標の総和は7となる)。この4指標の値を基準に夫婦を分類するため、非階層クラスター分析を行った。

その結果、Figure1に示すような特徴を持つ3クラスターが抽出された。第1クラスターは、他の2クラスターに比べ「相互非選択」数が多いことから(第2とは $t = 11.74$ 、第3とは $t = 6.15$ 、いずれも $df = 716, p < .01$)、「相互拒否」型と解釈した(39組が該当)。第2クラスターは圧倒的に「相互選択」数が多く、「相互選択」型とした。この群には111組が該当し、最も多かった。最後の第3クラスターは「夫

* 調査対象の選定方法、および回収率が、本稿の分析結果を一般化することに制約を与えていることを、あらかじめお断りしておきたい。

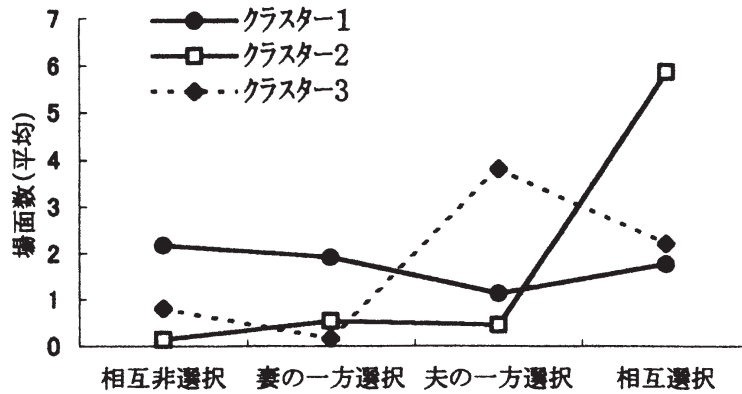


Figure1 各クラスターの特徴

の一方選択」数が最も多い点で際立っており、「夫の一方選択」型と判断した(32組)。

サポート源としての配偶者の比重は男性の方が高いが⁹⁾、夫婦単位でみると、これはすべての夫婦にあてはまるのではなく、実際にはそれ以外の夫婦も存在することが示された。すなわち、

- (1) 「相互選択」型：妻・夫ともにサポート源として配偶者の比重が高く、お互いに相手を重要なサポート源としている夫婦。
- (2) 「相互拒否」型：ともに配偶者の比重が低く、お互いが重要なサポート源となっていない夫婦。
- (3) 「夫の一方選択」型：夫は妻を重要なサポート源としているが、妻にとっては夫の比重が低い、夫の「片思い」の夫婦。

「夫の一方選択」型は抽出されたのに対し、理論上は存在しうる「妻の一方選択」型は抽出されなかった。

2. 各類型の特徴

抽出された3類型の夫婦について、その特徴を記述するため、以下の検討を行った。

2-1. デモグラフィック要因

妻・夫それぞれの生年、妻の職業の有無、子ども数、末子の年齢について、3群間で比較したところ有意差はなく、世代やライフステージ、妻の就業状況との関連は認められなかった。今回の調査対象者は、まだ子育てを終えていない夫婦であり、夫婦の心理的関係の変化が顕著に現れる以前の段階にあるため、ライフステージとの関連が認められなかったと考えられる。

2-2. 配偶者以外のサポート源

既婚者のサポート源を男女で比較した筆者らの結果では⁹⁾、女性・男性ともにサポート源としての比重は配偶者がもっとも高く、次に子どもであり、両者が他の対象より顕著に高い比重を占めていた。今回夫婦単位の分析で抽出された3類型では、配偶者の比重がそれぞれ異なっており、この結果があてはまらない類型もあると予想された。そこで、配偶者以外の対象も含めたサポート源について、各類型の特徴を検討した。各選択肢(サポート源)が7場面中、何回選択されているか、その頻度を数え、場面総数の7で割った値を用いて、群間の比較を行った。

妻のサポート源：「配偶者」、「親・きょうだい」、「友人」の選択率について、群間に有意差が認められた(それぞれ、 $F = 167.45$; $F = 4.82$; $F = 12.87$ 、いずれも $df = (2, 181)$, $p < .01$)。妻が夫を選択する割合は、「相互選択」群>「相互拒否」群>「夫の一方選択」群の順であった($t = 11.96$; $t = 4.40$, いずれも $df = 179$, $p < .01$)。逆に、「友人」の選択率は、「相互選択」群の妻が他の2群より低く($t = 3.24$; $t = 4.57$, ともに $p < .01$)、また「親・きょうだい」についても「相互選択」群が「夫の一方選択」群より低かった($t = 2.81$, $p < .05$)。一方、子どもを選択する割合には差が見られなかったため、夫と子どもの相対的比重の違いが各群の特徴となっている。すなわち、「相互選択」群の妻は夫>子ども、「相互拒否」群では夫=子ども、「夫の一方選択」群では夫<子どもという傾向がある(Figure 2)。

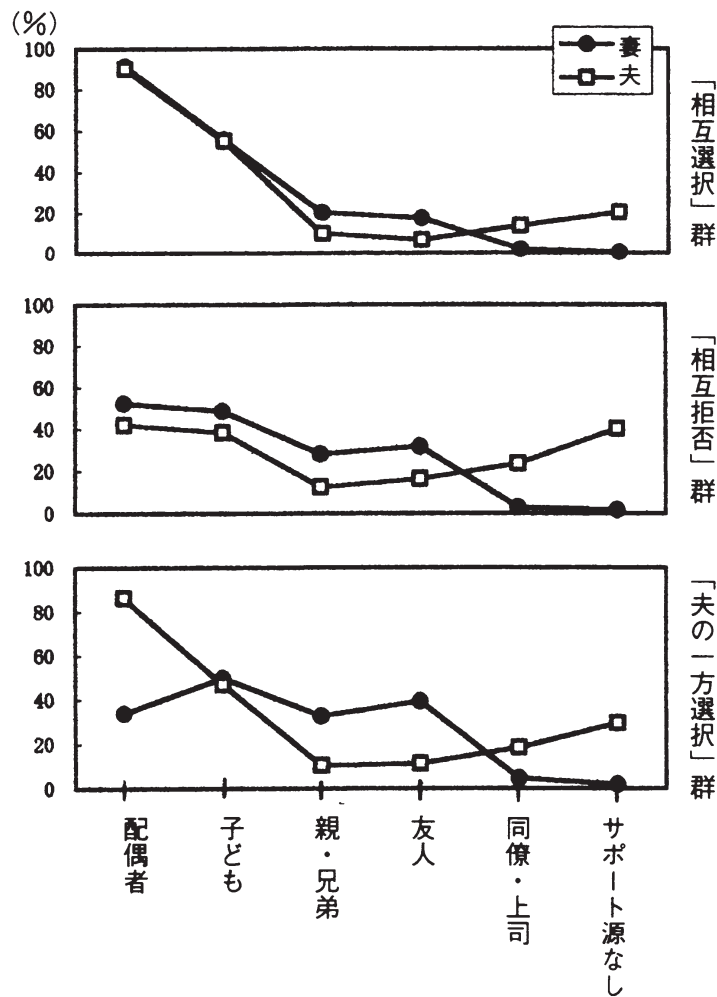


Figure 2 類型別にみる妻と夫のサポート源の選択率
(7場面中、各サポート源が選択された百分率を示す)

夫のサポート源：「配偶者」、「子ども」、「友人」、「同僚・上司」について群間に有意差が認められた（それぞれ、 $F = 172.17$ ； $F = 12.14$ ； $F = 5.51$ ； $F = 4.35$ 、いずれも $df = (2, 181)$, $p < .01$ ）。妻を選択する割合は、「相互拒否」群が「相互選択」群および「夫の一方選択」群よりも低かった ($t = 18.30$ ； $t = 13.08$ 、ともに $df = 179$, $p < .01$)。また「相互拒否」群は、「子ども」の選択率も「相互選択」群に比べ低かった ($t = 4.81$, $p < .01$)。逆に、「友人」および「同僚・上司」の選択率は「相互拒否」群が「相互選択」群より高かったが ($t = 3.26$, $p < .01$ ； $t = 2.91$, $p < .05$)、「サポート源なし」の割合も「相互拒否」群が「相互選択」群より高かった ($t = 4.41$, $p < .01$)。同じように配偶者の選択率の低い「相互拒否」群の妻や「夫の一方選択」群の妻ほどは、「親・きょうだい」や「友人」をオプションにできず、そのため「サポート源なし」の割合が「相互拒否」群で高くなっていると言えよう。妻と子どもとの相対的比重については、「相互選択」群および「夫の一方選択」群では妻 > 子ども、「相互拒否」群は妻 = 子どもとなっている (Figure 2)。

このように、前述の川浦ほか(1996)⁹⁾の結果が妻・夫両方にあてはまるのは、「相互選択」群のみであった。この群では妻も夫も配偶者の比重が子どもより高く、配偶者は最重要のサポート源である。友人その他の比重は相対的に低く、配偶者と子ども中心のサポート源となっている。一方、他の2群は異なる様相を示していた。「相互拒否」群は、妻も夫も、配偶者の比重が子どもと同程度でしかなく、他のサポート源との違いがあまりないプロフィールを示している。また、夫の「サポート源なし」の割合が特に高いことも、この群の特徴である。「夫の一方選択」群は、妻と夫のプロフィールの相違が際立って

いた。夫は妻を最も重要なサポート源とし、妻・子ども中心のプロフィールであり、「相互選択」群の夫に類似している。これに対し、妻の第一のサポート源は子どもであり、夫は他の対象と同程度の比重しか持たず、「相互拒否」群の妻に近いプロフィールであった。

2-3. 心理的適応との関係

次に、妻と夫の個人としての心理的適応のレベルを検討するため、川浦ほか(1996)⁹⁾の調査項目のうち、心理的適応の指標として用いた「疎外感」に関するデータについて類型間の比較を行った。

「疎外感」(alienation)は、「個人が集団や社会との関わりにおいて感じる否定的なニュアンスの強い感情」である(宮下, 1994)¹⁸⁾。宮下・小林(1981)¹⁹⁾は青年向けに「一般的疎外感」(宮下, 1994)¹⁸⁾を測定するための尺度を作成した。川浦ほか(1996)⁹⁾の調査で用いたのは、そのうち、「圧迫拘束感」と「空虚感」という下位尺度である。この2尺度は「状況関連的色彩の強い下位尺度」(宮下・小林, 1981)¹⁹⁾とされており、パーソナリティ特性としてより、心理的適応の状態像を把握するにふさわしいと言える。回答者の負担を軽減するため両尺度とも項目数を減らし、それぞれ因子負荷量の高い7項目とした*。また回答方法も7件法から4件法に変更した。この2つの簡易尺度を成人に適用することの妥当性と信頼性については、伊藤ほか(1999)¹⁶⁾で確認されている。この簡易尺度を用いた圧迫拘束感と空虚感について、サポート類型(3群)と性別(妻・夫)による2要因の分散分析を行った。

圧迫拘束感：類型の主効果が有意であり(Figure 3, $F = 5.23, df = (2, 358), p < .01$)、「相互拒否」群は「相互選択」群よりも圧迫拘束感が強い($t = 3.13, df = 358, p < .01$)。また交互作用が認められ($F = 3.16, df = (2, 358), p < .05$)、Figure 3に示すように、「相互拒否」群の夫は「相互選択」群および「夫の一方選択」群の夫よりも、圧迫拘束感が強かった($t = 3.23, df = 358, p < .01$; $t = 2.53, df = 358, p < .01$)。ただし、「相互拒否」群の夫と妻との差は有意ではない。さらに、「夫の一方選択」群の妻の圧迫拘束感は「相互選択」群の妻よりも強く($t = 2.27, df = 358, p < .05$)、また夫よりも強い傾向にあった($t = 1.91, df = 358, p < .10$)のに対し、夫の方は「相互選択」群の妻・夫と同様、圧迫拘束感が最も低い。

空虚感：類型と性別それぞれにおいて主効果が認められた(Figure 4、それぞれ、 $F = 6.79, df = (2, 358), p < .01$; $F = 5.04, df = (1, 358), p < .05$)。全体として妻は夫よりも空虚感が強く、また「相互拒否」群は「相互選択」群よりも空虚感が強い($t = 3.57, df = 358, p < .01$)。「夫の一方選択」群が「相互選択」群よりも空虚感が強い傾向が認められたが($t = 1.763, df = 358, p < .10$)、これは妻の空虚感が高いためであり、夫の空虚感は「相互選択」群の夫と同程度に低かった。

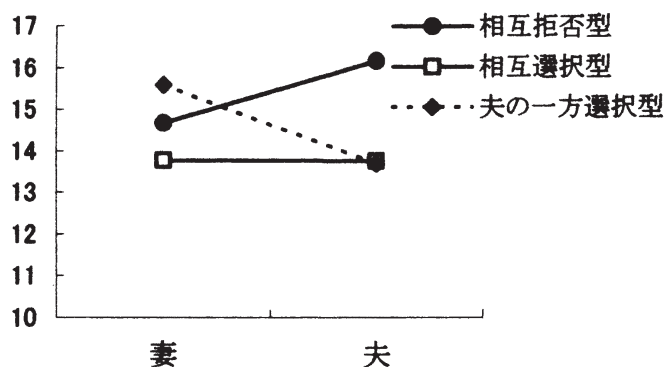


Figure 3 類型別にみる妻・夫の圧迫拘束感
(数値の大きさは強さを示す)

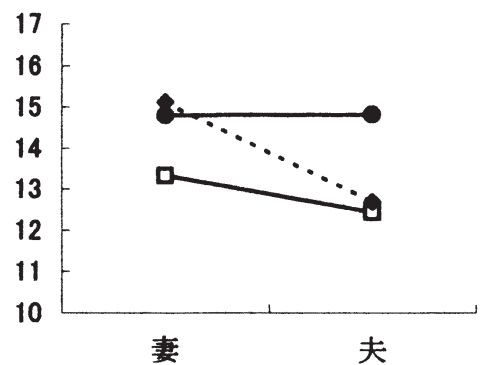


Figure 4 類型別にみる妻・夫の空虚感
(凡例および数値の方向は Figure 3 に同じ)

*「圧迫拘束感」は緊張や圧迫、ゆとりの欠如、その結果としての疲労感を内容とし、「何かにせきたてられて生きている感じがする」、「毎日が緊張の連続で息苦しさを感じることがある」、「自分がしたくないことをさせられているとよく感じる」などの項目からなっている。また「空虚感」は日々の生活における充実感の欠如を表しており、「生きがいもなくなつたなんとなく生きているようだ」、「わたしの生活は充実していて活気に満ちていると思う」(逆転項目)、「自分なりに一生けんめい生きていて満足だ」と思う(逆転項目)などからなる。

これらの結果を整理すると、次のようになる。

- (1)「相互選択」群：妻も夫も、圧迫拘束感・空虚感ともに最も低い。
- (2)「相互拒否」群：「相互選択」群よりも圧迫拘束感・空虚感がともに強く、とりわけ夫にその傾向が強い。
- (3)「夫の一方選択」群：夫の圧迫拘束感や空虚感は「相互選択」群と同程度に低い。他方、妻のそれは、夫および「相互選択」群よりも高かった。

2-4. 夫婦の会話時間と夫の家事分担度についての認知

次に、既婚者の心理的適応およびサポート源としての配偶者の比重に関わる要因について、川浦ほか(1996)⁹⁾の調査項目のうち、「夫婦の会話時間」と「夫の家事分担度」を用いて、類型間の比較を行った。

①夫婦の会話時間：1日あたりの配偶者との会話時間を「ほとんどない」(1)から「2時間以上」(5)の5件法でたずねた。また各夫婦について、妻の回答と夫の回答との差を求め(絶対値)、夫婦のギャップ度とした。②夫の家事分担度：家事全体を10とし、夫の分担度を妻と夫自身に0から10の11段階でたずねた。夫婦のギャップ度を、会話時間と同様の方法で構成した。

会話時間：Table 1に示すような群差が認められ、夫婦の会話時間は「相互選択」群が「相互拒否」群および「夫の一方選択」群よりも多かった($t = 6.67$; $t = 4.47$,ともに $df = 354, p < .01$)。しかし、夫婦のギャップ度はどの群も小さい。

夫の家事分担度：Figure 5に示すように、夫の方が自身の分担度を高く認知する傾向がみられる(全体の平均は妻 0.97、夫 1.12、 $F = 2.93$, $df = (1, 354)$, $p < .10$)。「夫の一方選択」群ではこの傾向がもっとも強く、夫婦のギャップ度も大きい。ギャップのほとんどない「相互選択」群との間で有意差が認められた(Table 1、 $t = 2.41$, $df = 175$, $p < .05$)。

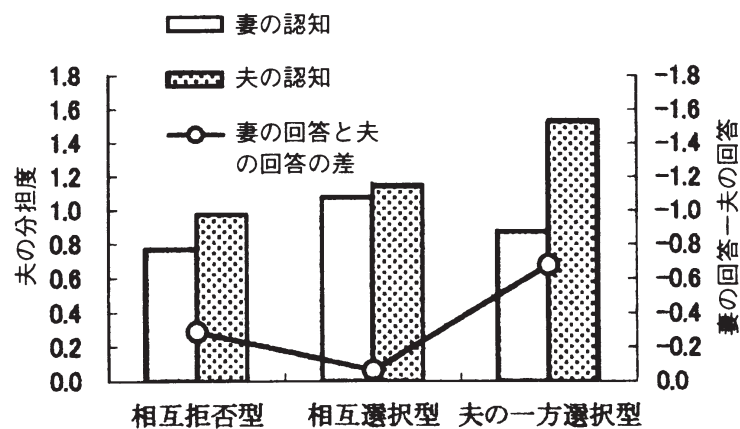


Figure 5 夫の家事分担度と類型

Table 1 類型別にみる会話時間と夫の家事分担度

	類 型				分散分析の結果			
	「相互拒否」型		「相互選択」型		「夫の一方選択」型	F値	df	p
<u>夫婦の会話時間</u>								
夫婦の認知*	2.62	<	3.58	>	2.89	26.59	2, 354	.000
ギャップ度	.18		.08		-.03	n.s.		
<u>夫の家事分担度</u>								
夫婦の認知	.87		1.11		1.21	n.s.		
ギャップ度	-.29		-.06	>	-.68	2.98	2, 175	.053

* <、>は多重比較の有意を示す。

考 察

筆者らがこれまで男女別に行った分析では⁹⁾¹⁶⁾、有配偶者にとって、配偶者は最も重要なサポート源であるが、その比重は女性よりも男性の方が高く、配偶者への依存度が強いことが見出されている。しかし、現実の夫婦像を考えると、こうした知見が一律にあてはまるのかどうか、本研究では夫婦の回答をマッチングさせて分析を行った。その結果、対象とした子育て終了前の夫婦について、3つの類型が抽出された。すなわち、夫婦単位で見ると、情緒的サポートに関する妻と夫の相互的な関係が、一様ではないことが確認された。

3類型の夫婦は配偶者以外のサポート源や心理的適応の状態、また会話時間、家事分担度についてもそれぞれ特徴が認められ、異なる夫婦像を示していた。最も多くみられたのは、サポート源としての配偶者の比重が妻・夫同じように高い「相互選択」型であり(全体の6割)、他の2類型に属する夫婦は少数であった(各2割前後)。「相互選択」型の夫婦は、相互に最重要のサポート源となっており、会話時間も多く、夫の家事分担度に関する認知も一致し、妻も夫も疎外感が低い。一方、「相互拒否」型の夫婦は、会話時間が少なく、妻・夫ともにサポート源としての配偶者の比重は子どもと同程度でしかない。とりわけ夫の疎外感が高い。「夫の一方選択」型は、夫が妻を重要なサポート源とみなしているのに対し、妻にとって夫の比重は子どもよりも低い。会話時間も少なく、夫は自分の家事分担度を過大評価していた。夫の疎外感が低いのに対し、妻は高く、心理的適応のレベルが異なっていた。

以上の結果は、どの夫婦においても、サポート源としての配偶者の比重が、個人の心理的適応に影響することを示している。しかし、夫婦のあり方からみると、「夫の一方選択」型は注目すべき関係である。「相互選択」型および「相互拒否」型は、妻と夫のサポート関係や心理的適応のレベルが類似しており、夫婦の関性に相互性が認められる。これに対し、「夫の一方選択」型の夫婦は相互性を欠いており、サポート関係や適応状態が妻と夫で大きく異なっているのである。どのようなジェンダー差が、この類型の成立に作用しているのだろうか。

男女別に分析した前回の結果では¹⁶⁾、会話時間は男女とも情緒的サポート源としての配偶者の比重を高め、また疎外感を軽減させていた。会話時間が少ない「夫の一方選択」型では、妻の方はこの結果があてはまる。しかし、夫の方は妻を最も重要なサポート源とし疎外感も低いので、この結果はあてはまらない。この類型の夫の場合、サポート源としての妻の比重は、会話という具体的な相互交渉とは無関係で、したがって疎外感にも影響しないと考えられる。さらにこの「夫の一方選択」型は、夫の家事分担度に関して夫婦の認知ギャップが大きい。このようなジェンダー・ギャップ*は、この類型を生じさせているようなメカニズムのジェンダー差に関連していると思われる。

「夫の一方選択」型の夫婦関係が成立する基盤はどこに求められるだろうか。妻の場合は心理的適応状態が良くなくとも、「相互拒否」型夫婦と同様、関係の維持と解消にかかわるコストを比較して、関係の維持を選んでいる可能性がある。一方、この類型の夫は、会話の少なさや家事分担度の過大評価からも、妻が自分のことをどう感じ、評価しているかなど、個人としての妻の心理状況に無関心であるようにみえる。夫婦関係における「読解スキル」は男性の方が女性より低く²²⁾、また配偶者について持っている情報量は男性の方が非常に少ないという²³⁾。すなわち、配偶者への関心のあり方におけるジェンダー差が、この類型の夫に典型的に反映されているとも考えられる。このことは「妻の一方選択」型が見出されなかったことの説明にもなると思われる。

では、「夫の一方選択」型の夫はなぜ妻の心理的状況と無関係に、妻を心理的支えとしていられるのだろうか。相手との相互的な関係性を欠いた、このような依存のあり方が成立するのは、日本の夫婦関

*「ジェンダー・ギャップ」(gender gap)という用語は、「(ジェンダーにもとづいた)機会や資源の不均衡な配分」(横浜市女性協会, 1997)を意味するものとして使用されてきた(例えば “gender gap in wage”)。多くは社会構造的な「格差」を表すために用いられているが、「同じ出来事に対するジェンダー間の認識のギャップ」(松井, 1997)のように、態度や認識について用いる例もみられる。本研究では、女性と男性が夫婦という単位を構成し共に生活しながら、両者が異なった認知や態度に至っていることから、同一の対象や状況についての両性間の認知的・心理的な不一致を表すことばとして、「ジェンダー・ギャップ」を用いる。

係が依然として性別役割分担に軸足を置いているからと推測される。「性別役割」を基盤とする関係であれば、ジェンダーにもとづくステレオタイプで相手を把握すればよく、妻の感情状態や態度に無関心でいられる。かつ、自分自身に対しても同様のステレオタイプを適用している可能性もある。そうであれば、会話を通じた自己開示が少なくても、関係自体は継続しうる。

最近では、勤め人男性であっても、「職業人」としての立場より「家庭人」としての立場を重視し、少なくとも「気持ちの上では」家庭を向いているという報告もある。しかし、この場合の家庭とは「生活の張り合いや活力・心の安らぎ」を提供してくれるものであり⁶⁾²⁴⁾、このような“家庭重視”なら自分が直接関わらなくても可能である。つまり「家庭人」という言葉自体にジェンダー・ギャップが含意されているのである。菅原ほか(1998)²⁵⁾によると、夫婦の愛情関係で分類した「夫片思い群」の夫は、仕事時間も多い一方で、家庭志向も強い。実際に家庭に投入するエネルギーは少ないのに、家庭が大切という意識は強いことになる。これも従来の役割分担によれば成立するのである。日本の男性は、結婚しているという「身分」が重要で、結婚生活への「精神的投資」が女性より少なく、妻と深くつきあうことにリスクを感じているという指摘もある²⁶⁾。

deTruck & Miller(1986)²⁷⁾は、ステレオタイプではなく独自の個人として相手を認知している夫婦の方が結婚生活により適応していることを見出している。日本の夫婦についても、夫婦仲がよいほど、配偶者を必要とする理由に「自分の理解者、異性として」などの回答率が高い²⁸⁾。固定的な性別役割分担が夫婦の心理的幸福感を阻害していることは既に指摘されており²⁹⁾³⁰⁾、性別役割分担を基盤とした夫婦関係ではなく、個人としての相互の関わりと対等なパートナーシップを基盤とした夫婦関係が、妻と夫双方の心理的適応にとって重要と考えられる。今回の調査には含まれていなかった性別役割観をはじめ、社会・経済的要因など、夫婦の相互性や結婚満足度における影響要因のジェンダー差を生じさせている背景を、詳細に検討することが必要と思われる。

引用文献

- 1) Ray,J. (1990) Interactional patterns and marital satisfaction among dual-career couples. *Journal of Independent Social Work*, 4, 61-73.
- 2) Argyle,M. & Furnham,A. (1983) Source of satisfaction and conflict in long-term relationship. *Journal of Marriage and the Family*, 45, 481-493.
- 3) Syrotuik,J. & D'Arcy,C. (1984) Social support and mental health : Direct, protective and compensatory effects. *Social Science and Medicine*, 18, 229-236.
- 4) Dean, A., Kolody, B., Wood, P., & Matt,G. E. (1992) The influence of living alone on depression in elderly persons. *Journal of Aging and Health*,4(1),3-18.
- 5) Peters, A., & Liefbroer, A. C. (1997) Beyond marital status : Partner history and well-being in old age. *Journal of Marriage and the Family*, 59, 687-699.
- 6) シニアプラン開発機構 (1997) 第2回サラリーマンの生活と生きがいに関する調査：サラリーマンシニアを中心として シニアプラン開発機構
- 7) 玉野和志・前田大作・野口裕二・中谷陽明・坂田周一・Liang, J. (1989) 日本の高齢者の社会的ネットワークについて *社会老年学*, 30, 27-36.
- 8) 笹谷春美 (1994) ジェンダーとソーシャルネットワーク：旧産炭（過疎）地と大都市居住の70歳男女に関する実証的研究 1993年度シニアプラン公募研究年報(シニアプラン開発機構), 117-138.
- 9) 川浦康至・池田政子・伊藤裕子・本田時雄 (1996) 既婚者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート：女性を中心に *心理学研究*, 67, 333-339.
- 10) じゃおクラブ高齢社会研究会 (1994) 地域で期待される今後のシニア男性像 1993年度シニアプラン公募研究年報(シニアプラン開発機構), 139-184.
- 11) Piña,D.L. & Bengtson,V.L. (1993) The Division of household labor and wife's happiness: Ideology, employment, and perceptions of support. *Journal of Marriage and the Family*, 55, 901-912.

- 12) 東京都立労働研究所(1994)共働き世帯のライフスタイルと疲労・ストレス 労働衛生研究,15.
- 13) Suchet,M. & Barling,J. (1986) Employed mothers: Interrole conflict, spouse support and marital functioning. Journal of Occupational Behavior, 7, 167-178.
- 14) 生命保険文化センター(1995)夫婦の生活意識に関する調査 生命保険文化センター
- 15) さくら総合研究所調査部(1994)国際家族年アンケート平成夫婦事情: 夫婦に関するアンケート調査 さくら総合研究所
- 16) 伊藤裕子・池田政子・川浦康至(1999)既婚者の疎外感に及ぼす夫婦関係と社会的活動の影響 心理学研究, 70, 17-23.
- 17) 大日向雅美(1988)母性の研究 川島書店
- 18) 宮下一博(1994)疎外感に関する測定及び人格心理学的研究の概観 青年心理学研究, 6,1-11.
- 19) 宮下一博・小林利宣(1981)青年期における「疎外感」の発達と適応の関係 教育心理学研究, 29, 297-305.
- 20) 横浜市女性協会・矢澤澄子(1997)女性問題キーワード111 ドメス出版
- 21) 松井真知子(1997)短大はどこへ行く: ジェンダーと教育 勁草書房
- 22) 堀毛一也(1994)夫婦関係スキルとその規定因の世代差に関する検討 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 6-9.
- 23) 博報堂生活総合研究所(1998)調査年報1998 連立家族: 日本の家族10年変化.
- 24) シニアプラン開発機構(1992)サラリーマンの生活と生きがいに関する調査: サラリーマンシニアを中心として シニアプラン開発機構
- 25) 菅原健介・八木下暁子・菅原ますみ・小泉智恵・詫摩紀子(1998)夫婦間の愛情関係と夫の生活意識: なぜ妻の愛情は冷めるのか? 日本社会心理学会第39回大会発表論文集 334—335.
- 26) 近藤 裕(1993)夫のための結婚心理学: 妻の変化に気づかない夫たちへ 金子書房
- 27) deTruck,M.A. & Miller, G.R. (1986) The effect of husbands' and wives' social cognition on their marital adjustment, conjugal power and self-esteem. Journal of marriage and the Family, 48, 715-724.
- 28) 明治生命フィナンシャルランス研究所(1995)「現役サラリーマン夫婦の意識調査」報告 明治生命フィナンシャルランス研究所
- 29) 東 清和(1993)退職による「生きがい」変化への対応 生きがいに関する研究会最終報告書: サラリーマンシニアの生きがい創造に向けて pp.1-28. シニアプラン開発機構
- 30) 岡道哲雄(1995)中高年の心の健康: 家族心理学の視点からの考察 岡道哲雄(編)現代のエスプリ別冊: 中高年の心理と幸福, 9-23. 至文堂